

目的 日本は世界に例を見ないスピードで高齢化社会に向っている。五人に一人が老人になる時代の介護の手、三人の就労者で一人の老人を養わねばならない時代の経済を考えると、従来の家族関係や経済通念ではいろいろの問題を解決することは難しい。そこで血縁に関係なく生き方に共感した者が、協力し助け合って、協合家族として家族の機能を果たすと共に、その裏付けとして時間を単位とした、第三の経済の流通を試みた。

方法 実験を試みて満十年、北海道から沖縄まで全国に約三千八百余名、アメリカ他三ヶ国に十八名の、十代から七十代までの女性のライフサイクルの違いを活用し、純粋なボランティア活動約四十五万時間、会員相互の助け合い（出産、託児、看病、老人の介護等）約一万五千時間の実践の結果、月二時間以上のボランティア活動で連帯感を強め、産湯の世話からシモの世話に至るまで、家族としての機能を果たし得ることが確認できた。

結果 会員資格の一つである、月二時間以上の純粋なボランティア活動をすることによって、時間の使い方が上手になり、一日三時間～四時間の余暇を計画的に活用すれば、一週間に三時間～六時間、社会のために使っても生活に差支えない実力を養成することができる。一時間一点という第三の経済は“時間の質”を向上させ、十年間流通しインフレのない安定感を与えている。日本の高校生以上の者が、一週間に三時間～六時間老人の介護を心掛ければ、世界に例のない速度で来る高齢化社会を乗り切ることができる筈である。